

十二學會聯合 工學會大會の記

初の明治節を以て日本工學會大會が東京帝大記念講堂に開催された、數ヶ月前から工學會幹部諸先輩が非常な御盡力で、日本の十二學會の聯合大會と云ふものが初めて開かれたわけであるから、全国各地から知名の技術家が殆んど參會するの盛會であつた。出席會員 2,793 人の申込を報ぜられた。

明後年日本に於て開催せらるゝ萬國工學大會の小手調べとして申分なき成績を収めたもので、此の工學大會は我々一般技術家の充分に注意すべき事件で今後各方面への影響も甚大であると思へるから、大會の概要を傳ふる事にする。

十一月三日(明治節) 午前十時開會

會場 東京帝國大學大講堂

開會の辭	工學會理事長	工學博士	男爵	古市公威
祝辭		商工大臣		中橋徳五郎
祝辭	文部大臣	法學博士		水野鍊太郎
祝辭		東京帝國大學總長	農學博士	古在由直
祝辭	東京帝國大學工學部長	工學博士		岸本 晴

講演

基本工業概論 (約 1 時間)

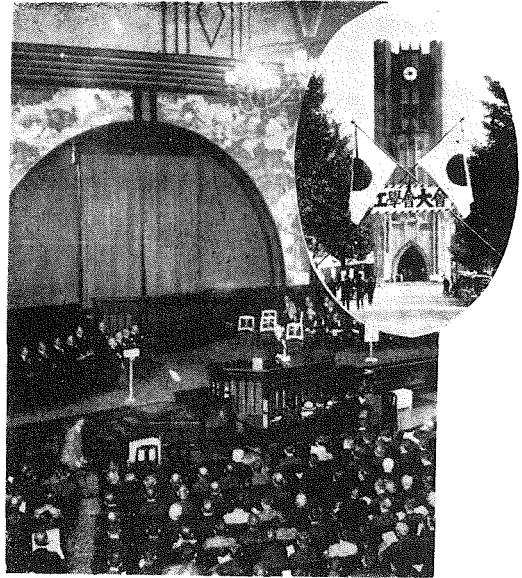
理化學研究所長 工學博士 子爵 大河内正敏

午前十時振鈴と同時に工學會理事長たる古市公威男爵開會の辭を述べ、二千餘の會員大拍手を以て迎へ、次で來賓中から概要次の祝辭演説があつた。

祝 辭

文部大臣 水野鍊太郎

明治節に當り此の大會の開かるゝは感慨殊に深し、明治大帝即位後本年にて六十年、明治初年徼々たりし我邦は今や世界の八大産業國の一で有る、此の進展は教育に負ふもの大である、此點は列席の諸君の指導によるものと思はる、科學は必ずしも學校に於てのみ教へるものでなく學會を大に必要とする、學會は一國の文明を進歩せしむる最大必要で有る故に工學會が中心となり各學會が連絡をこるには斯かる大會が必要で有る本日此の大會の



General meeting of the Engineering Association of Japan. They held a big meeting at the Imperial University and it was so prosperous that every noted engineers and scholars in Japan were present there.

開かれたのを喜ぶ。

祝 辭

商工大臣 中橋徳五郎

維新以來明治初年の我國工業は歐米の模倣移植で有つたが今や其時代は過ぎた、これ我國工業學術の進歩に歸すべきものと思ふ、學術の進歩は學會に負ふもの大で有る、今回工學會が十二學會聯合して大會を開かれたるは我國産業界に多大の反響を及ぼす事と思ふ、明後年に又東京で萬國工學會が開かるゝ由なるが其際政府も出来る支援助をしたいと思ふ

祝 辭

理事長 男爵 古市公威

近年科學研究益々盛となり益々専門的に深く狭くなり、一方共通點が有るから各學會は互に没交渉ではいけない、相互に援け合はねばならぬ、之此大會を必要とする所以で有る明日から開かるゝ各部會の何れにも出席出来るから専門外の智識を吸収して自己専門の發展に資すべし、本會の開かるゝに當り多數の出席を見たるを喜ぶ、終りに政府が此大會を重要とし商工、文部兩大臣親しく來會祝辭を

述べらるゝ事を光榮さす。

祝文

東京帝國大學大實行委員長 依國一
學總長代讀

工學の盛衰は國運の消長に係る、我邦工業は近時長足の進歩をなせしも歐米に比すれば猶遜色あり、資源乏しき我國の如きは各専門家協力指導に努めざるべからず、本日後に十二學會連合して各種専門の士相會し知識の交渉をなすは機宜を得たるものと思ふ。

祝辭

東京帝國大學工學部長 塚本靖

近年工業の進歩著しく殊に各専門の間の關係密となりし關係から今回の催さなつたことは誠に有意義の事で行る。

基本工業論

理研所長 工學博士 大河内正敏

原料の少いスイス國が精密工業の發達の結果、即ち時計類の製作は世界第一であるが、之が爲めには他の大規模の機械工作に於ても非常に發達をなし、土木用機械やタービン等は世界の市場に搬出して英米品と競走してをる。

日本も原料難を嘆ずるには及ばぬ、先づ工業の基本の一たるべき精密工業を盛んにし、其の第二たる合成化學、染料工業等を盛んにしたならば他の諸工業も自然と發達するのである。云々

十二學會代表講演要旨

本邦鑛業之趨勢

日本鑛業會々長 依國一

鑛業は工業材料の最も重要なるものを供給するものである。

本邦にては昔時から盛に稼業せられたので既に徳川時代の初期には年々七百萬圓の金銀を産出したと稱せらる、明治御維新以來政府は鑛業を獎勵せられたことを述べ、次に採鑛選鑛及冶金に關する技術の進歩は本邦に於て地域狭少、地質複雑なるに拘らず能く特殊の發達を遂けたるもの其數多し夫等を概説する最後に鑛産物の額は昨年五億萬圓以上に達し

之を二十年に比するも四倍又十年前に對し一倍三分の増加をなせることを説述

明治維新以來我國土木施設の一斑

土木學會々長 市瀬恭次郎

講演の要旨は維新以來我國に於ける土木の施設を治水。港灣。道路。運河。上下水道。發電用水力。鐵道。及軌道の八項に分ち其變遷を約叙す

造兵學の現況

火兵學會理事 青木保

造兵學の大要を述べ(一)媒體(空氣、水、土砂、金屬等)の抵抗並固體間の摩擦と(二)金屬の可塑性と及(三)測量類の三項を造兵學上日下の三問題として提唱し、實際問題と關聯して其撮要を説明

我國電力界の現勢

電氣學會々長 中村幸之助

電氣供給事業、電氣鐵道事業、電氣應用工業及此等各方面に必要な各種機械器具製造事業進歩の發達の狀況を述べ電力界の現勢を紹介す。

機械工業發達の趨勢

機械學會々長 加茂正雄

蒸汽原動機内燃機、船用機關、航空機、自動車、水車、機關車及客貨車、渦卷ポンプ、冷凍機、工作機械、紡績工業等の諸項につき其發達の狀況、現時の狀態並に其將來に關する意見の一二を簡略に陳述せんさす。

輒近我國に於ける造船の發達

造船協會々長 今岡純一郎

緒言次に海運の地位を述べ造船業の發達、造船技術の發達を高船と軍艦とに分ち略述し我造船獎勵政策、船級協會に及び最後に造船業の特徴及各種工業との關係を以て結ぶ。

建築界に於ける進歩の狀況

建築學會前會長 横河民輔

明治維新以降歐羅巴建築の移入より大正を経て昭和に至る構造様式の變遷及建築界の概觀を述べ。

我國に於ける衛生工業發達の梗概

衛生工業協會前會長 曾 爾 達 藏

衛生工業の何たる乎を説明し其重なる種類を別舉し其中の蒸汽煖房、温氣煖房温水煖房及冷房法換氣法の起源より今日の發達に至れる經路を略叙しプランニング工事汚水、汚物の處理等に言及す。

冶金學上より見たる鑄造術進歩の趨勢

日本鐵鋼協會評議員 齋 藤 大 吉

鑄鐵鑄造術は機械製作業の基礎なるに最近まで其研究は寧ろ忽せにさて居つた然るに最近十數年來内燃機、自動車工業の發達、高熱蒸汽の應用等は高級鑄物を要求するに至つた結果内外さも最近多常の進歩も呈するに至つた、本邦に於ても大正七年石川登喜治博士が菊日の組織鑄鐵の研究も發表してより以來各所に於ける高級鑄物の研究漸く旺盛となり東には新潟鐵工所松浦氏の高滿庵せし「スチール」の如き西には堀切工學士の高滿庵高法素せし「スチール」の如き何れも出色のものである歐米に於ける此種の研究中「ランツ式」「バーライト」鑄物「エンメル式」低炭素鑄鐵の熔鉄爐熔融法、「ピウオワルスキー」の熔鐵過熱法等探つて以て吾人の參考に資すべきもの多し雖も本邦に於ける研究も決して彼に劣るものに非ることも高唱す。

最近十年間に於ける我國照明界の進歩に就て

照明學會々長 本 野 亨

最近十年間に於ける我照明界の進歩の跡を省みれば實に隔世の憾があるがこれ全く真空タングステン電球の進歩、瓦斯入電球の勃興によるもので殊に瓦斯入電球の出現を見なかつたなら照明界のあらゆる方面に到底今日の盛況を見ることは出来なかつただらう其結果さして需用家燭力の増進街路屋外の照明に顯著なる進歩を示している。

懇親會晚餐會

帝大講堂に於ける大會後、午後六時から上野精養軒にて會員有志の晚餐會が盛大に行はれ出席者 470 餘名に及んだ。

翌十一月四日からは各學會の部會講演會が各所で開催された、其中で土木學會と建築學會との講演者は次の通りであつた。

土木學會の講演會

會場 麴町區有樂町 商工獎勵館

(第一日)十一月四日午後五時開會

演題及演者

風と低氣壓に伴ふ海水位の變化に就て。
東京帝國大學教授 井 上 範
二軸的に見たる熱應力の問題。
東京帝國大學教授 山 口 昇
促進汚泥法の實驗報告。
東京市土木局下水課三河島汚水處分場長 廣 中 一 之
水道大鐵管の磨損に依る損失水頭の實驗報告。
東京水道局工事課長 小 野 基 樹
鋪裝に就て 復興局道路課長 牧 野 雅樂之丞
荒川橋梁工事に試みたる新工法に就て。
鐵道省東京第壹改良事務所長工學博士 大 河 戸 宗 治

(第二日)十一月五日午後五時開會

演題及演者

清水隧道工事に於ける液體酸素爆藥の試用に就て。
鐵道省建設局工事課長 橋 本 敬 之
本邦に於ける道路施設
内務省土木局第一技術課長 島 重 治
本邦に於ける港灣に就て
内務省横濱土木出張所長工學博士 安 藝 杏 一
田代川發電所建設工事に就て
東京電力株式會社田代川建設事務所長 新 井 榮 吉
鐵道隊道の開通後に於ける換氣。
京都帝國大學教授 瀧 山 與
日本及獨逸の標準試驗方法に依る同一混凝土の應壓強度に就て。
九州帝國大學教授工學博士 吉 田 徳 次 郎

建築學會の講演會

(日時)十一月五日午後一時より五時迄

會場 東京市麴町區永樂町

日本工業俱樂部

演題及演者

開會の辭。
副會長 正員 工學士 中 條 精 一 郎
君光彈性學に依る構造の研究。
東京高等工業學校教授正員工學士 二 見 秀 雄
キトルキウスの建築論。
京都帝國大學助教授正員工學士 森 田 慶 一
耐火構造。
東京帝國大學教授正員工學博士 内 田 祥 三
鐵筋コンクリート構造の實驗的研究に就て。
神戸高等工業學校教授正員工學士 田 邊 平 學
建築藝術に對する一考察。
東京帝國大學教授正員工學博士 伊 東 忠 太
閉會の辭。
會長 正員工學博士 塚 本 靖